

贈る言葉

倉田 稔

商大の良心というべき村山出先生が、退官された。

村山先生は、1931年の生まれであるから、青年時代に戦後の政治的大変革と経済的混乱の時代をしっかりと見つめていた。その中で、真の民主主義者になった。

村山先生には、誠実な教育者の一面がある。大学院に通いながら、夜間高校の先生をしておられたが、そこで実に生徒に対して親身になって教育をし、世話をした。これは先生の人柄がそうさせたのだが、商大でも誠実に教育にあたった。今日、教育と研究との矛盾が議論されるが、これは実は教師の人間的性格の問題につきるのであって、先生のように、学生を大事にするということが、全てなのである。

若いとき生徒の教育を熱心にしたので、研究者としての出発は遅かった、と先生は語られた。だがその遅いという出発にもかかわらず、研究では高い所に達した。先生は、上代文学の、特に万葉集の研究家である。小生は異分野なので輪郭しか言えないが、先生はこの領域では、日本で二、三人の最高の研究家のうちの一人である。先生のご研究については、文学講演会で3回聞かせていただいたが、分かりやすく、滋味があり、凡俗の言い方をすれば、面白い。そして深みがある。先生の学風は、危ない流行の方法をとらず、事実の探索と過去のあらゆる研究・学説を踏まえて、新自説を展開するものである。また、単純な文学理解だけでなく、時代の社会史を研究の背景に置いている。だから幅が広い。

先生が主導して、小樽商大で、その学会も催した。先生が受け持っている一つである少人数クラスでは、短歌の解釈を主に教授されていた。授業の一環として、隔年か毎年かに、学生を連れて関西文学旅行も企てた。それは、

評判がよくて、職員も参加したほどである。

小生は、よく先生の研究室に伺った。つまらない用事をわざと作って行ったのだが、目的はそれとは違って、先生の楽しい話を聞きにいったのである。先生は、仕事中のワープロをとめて、おいしいコーヒーを入れて下さったものである。ある時、小樽の町中からの帰りに、「先生はいつも論文のストックはどのくらいありますか」と聞いたら、「そうね、15、6本ですかね」と、こともなげに言う。そういう勤勉な先生の所へ行って、小生は、文字どおり、お邪魔していたのである。先生はいつも、学会報告、依頼原稿、独自の研究論文をかかえて、勤勉に執筆しておられた。

その先生が図書館長に選ばれて、その任につくことになってしまったのである。3年間にそがしい仕事を良心的になさったので、研究時間も相当奪われたことであろう。

ジェントルマン、紳士、という言葉が、村山先生ほどあてはまる人はいない。村山先生は、穏やかで優しい。そして謙虚である。ただし、よく接すると、時々鋭い世相批判を語る。これがまた絶妙なのである。先生は、たんに温和なだけではなく、骨がある。小生は、村山先生が心の清い人なのだと、思っている。青年のようである。だから世の中の汚れた部分を徹底的に嫌うのである。小生のように社会学者が、反対に村山先生から社会を学べるのは、そこにもある。

先生を語るには、フラオ・村山を語る必要があるのだろう。先生が奥様を語るときは、近代フェミニズムの流れにある。1人の女性として職業をもっていることを高く評価しておられる。お二人の職場の関係から、離れて生活されていたので、多分特別の思いにあったであろう。長い休みには、お帰りになるのだが、「なんだか自分の居場所がなくなっている感じですよ」と、冗談を言われた。先生は、実は、さりげないユーモアをいつも言う。そして座談の名手であった。

若い人々は先生を、とにかく人格者だ、と言っている。村山先生は、名誉教授になるのに、多分数年か、勤務年がたりなかった。それが話題になると、

彼らは、村山先生に名誉教授号を出せなかったら、他に出す対象者が誰もいなくなってしまう、とまで言っていた。さらに、村山先生だけは特別に、定年を伸ばして、もっといてもらいたい、と語っていた。人は、定年を迎えるのは、めでたいことだ、と言う。しかし小生は、村山先生については、そんな言葉は聞く気にならない。ベーコンのニュー・アトランティスで言う、光が失われた思いである。

先生は、商大を去るとき、「商大は良い大学ですよ」と、言葉を残して行った。

大体、立派な学者で、教育者、そして人格者であるという、三拍子揃った人物を、現在の日本の大学で見つけるのは、至難の業である。村山先生は、その稀有の存在であった。

もし小樽商大に大学の歴史の女神がいたならば、村山出先生が14年間もわが大学に勤務して下さったことにたいし、彼女は、自分の額に先生の名を永く刻み、村山先生に、熱い感謝の念を贈るであろう。